
復讐請負人、蘭

梢田 了

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐請負人、蘭

【Nコード】

N8971E

【作者名】

梢田 了

【あらすじ】

身勝手な少年らの犯行により、最愛の妻、息子を失った石島。法律に守られた彼らに復讐の二文字を胸に、復讐請負人という人物へ依頼をする。しかし、そこに現れたのは――

（前書き）

とてもマズイ文章ですが、ひとときの間をお楽しみいただけたらと思います。

自分の愛する者の命を、奪われたことはあるだろうか。

それも、とてもひどく。まるで人間でないかのような仕打で。

「……どういふことなんですか、刑事さん」

「……………」

男の問いに、目の前の刑事は、あごの下をかきながら、ひどく落ち込んだような顔をみせた。

いや、見せた فقطだと、男は思った。

「なぜ、あんな連中をかばうんですか！」

「それは言いがかりです、かばってなどいませんよ」

「じゃあ、なぜ——妻と息子を殺した、あの畜生どもの名前すらも、わたしに教えてくれないんだ！」

そう。男の妻は殺された。息子も。

それだと言うのに——

男は、憎悪に滾った目で、刑事職の男を睨んだ。瞼の下に傷のある男を、まるで仇かというほどに、目で殺さんとするように。

「何度も、説明しましたがね……石島さん、この日本には、法律というものがあるんです。彼らが少年である以上、いたしかたのない

——」

「——なに言ってるんだ、刑事さん！ 法律つてのは、人間のためのモンだろう！ 法律のための人間なんかじゃあない！」

「お、落ち着いてください、石島さん……！」

後ろから羽交い絞めにされ、しかしなおしばらく、男は暴れ続けた。

あれから数年が過ぎた。男、石島 イシジマ 幸雄 ユキオ は喫茶店の中にいた。喫茶店の名前は シルフウド —— 全体的に薄暗く、しかし、ど

ことなく懐かしさを感じさせるそこは、優しいクラシックと混ざり、レトロな雰囲気をもし出している。

ズボンのポケットからハンカチを取り出し、額にたまった汗を拭く。スーツを脱ぐと、角の丸い六角の机の隅へかけるようにしておいた。鞆を上に乗せ、落ちないようにする。

（遅い——もう、約束の時間はとくにすぎているぞ）

貧乏揺すりをしているのに気づき、ふと、意識して足の動きを止めた。そして――

「イシジマ……石島 幸雄さん？ ですよ？」

唐突に呼ばれたこと、いやそれ以前に、自分の名前を呼ばれたことに愕然とし、石島は振り返った。

石島 幸雄がこのサイトを見つけたのは、まさに偶然だったと言っている。会社の昼休みの時間帯を利用し、頻繁に近くのネットカフェに足を向けていた。

まだ若いというのに、その時間帯にスーツ姿のまま、その単語だけを検索し続ける男の姿は、傍目からも異様に映っただろう。

復讐請負人。

そう、彼は、自らに代わって悪を裁く者を探していたのだ。そして辿り着いたサイトこそ――

「あー、失礼。いきなり本名を出されちゃったら、驚きますね。普通は」

男は、どこにでもいそうな容姿だった。いや、極端に地味ともいえる格好である。サンダルに、白のストライプの入った青のジャージ、香港魂と、でかでかと載せられたロゴのTシャツ。ぼさぼさとした感じの、あまり手入れされていないような髪型に、ところどころにある無精髭。極端に分厚い眼鏡をかけたその容姿は、みつともなく、だらけた印象しか与えてこない。

「……あ……ま、まさか、あんたが……？」

瘦身瘦躯の石島の、信じられないといった口調。男は、自分のあ

ごを撫でさすり、なにを思ったか髭を一本抜くと、吐息にのせてそれを飛ばした。

そして、言う。

「どーも、初めましてこんちは。 請負人 の――蘭アララギです」

「……………」

「あや。どーかなさいました？」

向かいの席に座った男――（請負人 の蘭はそう言うと、石島がさきほどまで口に運んでいたカップを手に取り、許可もなしにずるりと啜る。あまりにもイメージとかけ離れたその姿に、石島は絶句した。

何日もの間、ろくに寝ず、仕事の合間をぬってまで探し出した最後の頼み人が、こんな輩だったのかと。

「あんたが―― 復讐請負人 ？ 冗談じゃない！ やっぱり、悪質ないたずらだったのか」

「いたずら……。まー……否定はしません？ が。大抵の方は、俺を見るとそういう反応しか、してくれませんので」

蘭の言葉に、石島は立ち上がった。がたん、と大きな音が店内に響いた。元々、客の入りも少ないその店で、石島にはその音の存在感が妙に大きく感じられた。

「もう、いい。あんたなんか、こっちから願い下げだ」

その剣幕にも動じず、蘭はカップにもう一度口をつけた。

「……………少年A、B、そしてC。Aの本名、浅野アサノ 忠弘タタヒロ。Bの名字は河野コウノ――残りの半分は、報酬を頂き次第」

石島の動きが、ぴたりと止まった。その静止した姿は、彫刻を思わせた。

蘭はそれだけ言うと黙り込み、石島の後姿を分厚い眼鏡を通してじつくりと観察している。石島は、震えた。

「――あんた……、本物なのか？」

「……………石島さんがどんなのをイメージしてらっしゃるのか、正直、知りませんしどーでもいいんですが……………」

カップの底に残った液体を、一気に喉に流し込む。机にカップを戻すと、満足そうに舌なめずりした。机の中央にあるトレイに設置された中から、ティッシュをつまむと、鼻をかむ。

「本物です。俺は—— 請負人 です」

「……………」

「あなたの気持ち、請負ます」

「ああ、クソっ。もうスつちまった！」

「早いなあ、秀樹^{ヒラキ}」

「あんだよお、マシンの出が悪いだけだってんだ！」

「ははは、と笑い声が重なる。ひとつのスロットにたむろする男たち——その数は5人ほど。

それを横目で見ながら、台を叩く。

「なんだよ……………」

歳は20半ばといったところだろうか。上から下まで黒のスーツをきつちりと着込み、指や首には、金物がぎらぎらと光っている。

男は、台を叩いたせいで特注の髑髏を象った指輪に、傷がついてやいないかと確認した。しながらも、口は開いたままだ。

「この俺サマにあんな小僧どものストーカーしろってのかよお？

請負屋さん」

くるりと椅子を回し、唸るようにして言った。そこに猫背で立っていたのは亡霊のような 請負人 —— 蘭だ。

蘭は同様も見せず、ぴくりともせず、全くもってのポーカーフェイスだ。しかし、ゆったりとした動作でもって、両手をあげた。頭頂部に、両手の指先をのせ、大きな輪をつくった。

「そーだよーん」

「……………」

抑揚のない口調でしれっと言ってのけた蘭に、若い男は額に青筋を浮かべた。蘭とは全く違う、ところどころツン、と出た部分はあ

るが、基本的にサラサラとした髪をなで上げ、かけていた細いサングラスを、中指で直す。

そうやって落ち着いたのか、そうでないのか。むりやり笑みを浮かべた。

「お前さんのそういうところ、ムツカつくんだよ……」

「他のお客さんと、接し方がずいぶん違う……」

「なにを……?」

口元をひくひくと引きつらせたが、間もなくふい、と顔をそらした。

「報酬は?」

「んー……ひとり5万くらいが、依頼主からの条件」

「……なんだよ、そのくらいってのは? それに安すぎだぜ」

蘭の言葉に、男は顔をしかめた。

「三年ほど前の、例の事件——ガキどもによる集団レイプ、だっけか? その犯人とされてる少年ABC——やつらのデータ……行動パターンや家族構成、そいつらの少年院出の後、その前の全てを……」

男は立ち上がる。その身長は、請負人 よりも頭ひとつ分、高かった。色の濃い、しかし決して瞳が見えないわけではないサングラス——その奥の瞳に、怒りの炎が見て取れた。

「全部、洗いざらい調べ上げて、お前さんに調書みたくして提出するんだったよな?」

「……そーだ——」

「——せんでいい」

再びわっかをつくった蘭の腕を即座にはたとと、胸倉をつかみあげ、苛立たしげに告げる。

「請負屋さんよお、あんた、この俺サマを舐めてらっしゃる? この久遠 クドウ 虎之助 トラノスケ をよ……」

「舐めてない。…… 烏 さん、そろそろ蘭って呼んでくれないと、会話も不自然になっちゃう。違和感が、こお、ぴりぴりっ」と

「バリバリ、だろお？　はあ——俺の事は久遠と呼ばないくせに」

情報屋、久遠　虎之助——裏家業に勤める彼は、蝙蝠、

烏などの通り名をもつ男である。どこの組織にも属さず、どこ
の味方もしない——独自のネットワークから情報入手し、警察や
他の表・裏家業に通じている。

「そんな事よりもな、人を3人も　復讐　するんだろおが。15万
はちいとばかり、てかかなり——辛くないかい」

情に流されやすい性格で、それ故に危険も多々あるが、築き上げ
た信頼から、それが渦にもなるし、福ともなる。

「——いや。5万。多くともひとりあたり、8万で十分に通用する」
「……通用する、だと？」

わけがわからず、久遠は目を白黒させた。それを見て、蘭の唇の
はしが、くい、とあがった。初めてみせる、蘭の表情だった。

それから数日。まだ、陽も上りきらない朝方。

スーパーマーケットの裏手にあるパーキングエリアに、三人の少
年がいた。——浅野　忠弘、河野　秀樹、そして橋田^{ハンダ}　哲夫^{テッオ}——

「おせえなあー」
「なあ？」

思い思いの格好をしている3人は、退屈そうに携帯電話をいじつ
ていた。話題があるでもなく、ただ携帯電話の画面を見つめている。
ボストンバッグを椅子代わりにしていた忠弘たちの元へ、ひとつ
のワゴン車が停まった。

「いやあ、早いねー、君たち」

そう、爽やかに笑いながら出てきたのは、まだ20半ばといった
ところか。髪型はオールバック、フレームつきの眼鏡をかけ、灰色
のスーツを着込んでいた。

「あ、寺島^{テラジマ}　船灯^{セントウ}さんっすね。今日はよろしくお願いしまっす！」
忠弘が一步前に出て、頭を下げた。ボストンバッグに座っていた

ふたりも慌てて立ち上がり、忠弘にならう。

「任せてくれよ。君たちが河野くん、橋田くんだね。よろしく頼むよ」

朗らかに言うと、寺島は3人に背中を見せた。

「さ、車に乗って。早いトコ移動して、終わらしちゃおう。君たちも眠いだろうから」

「ういーっす」

秀樹が陽気に答えを返した。車に乗り込む寺島の後ろで、3人が談笑する。時折、寺島もその話に口を挟んでは、場を盛り上げさせた。まず、好印象だろう。——しかし。

「……………」

寺島の顔は、笑っていなかった。

「そっぴや、君たちさあ、同時期に高校をいったん、やめちゃってみたいけど、なんかやってたのかい？」

「——え？」

一瞬、車内に不穏な空気が停滞した。哲夫が挙動不審に、そわそわしだした。それを忠弘が肘でつつき、睨む。寺島の問いに答えたのは、秀樹だった。

「ああ、俺らあ、ちよつとした夢みたいなモンがあつてえ——」

「へえ。そっか、その夢を実現させたくて、みんなで高校をやめちゃったワケだな！」

「そうそう！ 寺島さん、話わかるう」

哲夫が妙に明るい声をだし、あっけらかんと笑った。空気が和やかなものにかわるなか、寺島も笑い、こともなげに言った。

「ははは、まあ、それでも——結局はフリーターに落ちぶれたわけだ」

「……………」

忠弘が、ぎつ、という音がしそうなほどに、鋭い視線で運転席を睨んだ。その殺気にも似通った怒気を肌で感じ、寺島はそっと、息をつく。

「まあ、若いうちは冒険が必要だし、挫折だつてある——だが、それをどう活かすかで、失敗もチャンスに代わる！」

にやり、と寺島は笑みを浮かべた。バックミラーは偏った位置にあり、こちらの顔は見られないだろうが——

「君たちには悪いけど、その失敗は、今日この日のためのものだったと思うんだ。これはビッグビジネスだ。チャンスを逃さずにつきり、働いてくれ」

「……はいはい、わかりましたよ、寺島さん」

釈然としないものを含ませながら、忠弘はしぶしぶ頷いた。

そう、これはビッグビジネス——人を誤って殺してしまった哀れな俺たち——いや、俺に、神が与えてくれた最大の転機チャンスなのだ！

話は一昨日である。深夜の帰路に、この寺島が現れたのだ。

「やあ、浅野 忠弘くん」

「……？ 誰だよ、あんたは」

「僕かい？ 僕は寺島 船灯。君たちのいた、あの少年院に勤めている者だよ」

「——！？」

この言葉を聞いて、忠弘にまず浮かんだのは、すぐ先日私刑した中年の男だった。いや、もっと以前に——というよりも、少年院を出てからたった3ヶ月をへて、オヤジ狩りを連続して繰り返してきたのだ。この少年たちは

「ま、まさかあんた、また俺をあそこに戻そうとして——？」

「戻そうと……へえ？ どうしてそんな被害者意識を……。ははあ、さてはまた、やんちゃしましたね？」

にやり、と笑う寺島に、忠弘は戦慄した。全身が総毛立つような悪寒とともに、言い知れない不安と心細さが、ずしりと押し掛かった。

「ちょうどよいコトを聞きましたよ。これで、取引がしやすくなった」

「……は？ 取引？ なんの？」
「ふふふ」

寺島は人のよさそうな笑みを顔面にはりつかせると、持っていた手提げ鞆から、分厚い封筒を取り出したのだ。それを忠弘に手渡した。

「……？ ——！」

絶句した。その封筒の中には、札束が入っていたのだ。ぱつと見ても、10万は超える。わけがわからずに、呆けてこちらを見やる忠弘に、寺島ははまだ笑みを絶やさず、言った。

「取引したいんですよ、浅野くん」

「だ、だから、取引って？」

「君、3年前に人妻をレイプして、被害者と被害者の子供を、殺したでしょ？」

あまりにも単刀直入なその言葉に、動揺しながら辺りを見回した。幸い、誰一人として、通っていない。それもそうだ。ここは元々、人通りの少ないはずだから。

「……なにが言いたいんだ？ 取引って……」

「それじゃあ、単刀直入に言わせてもらおうよ」

——さつきも十分、単刀直入だったよ。

忠弘が心の中で答えると、寺島は小さなチラシを渡してきた。

（これは……？）

「契約書だよ、レイプ犯の1人である君から、今の生活と、犯罪を起こしたときの生活とをインタビューする——といったようにね」

「……はあ……？ あ、頭おかしいんじゃないの？ あんた！」

「そつかい？」

理解できないといった口調の忠弘に、こちらこそ理解できないといった表情を見せた。

「今の日本の記者ってのはねえ、ハイエナみたいなやつらでね。大丈夫、ちゃんと顔や名前は出さないようにするし。それに、ちゃんと報酬もあげるよ。それは前金の15万円だ」

「15……!？」

寺島は言った。にやりとして、「小遣い稼ぎには十分だろう」と。
「ザンネンながら、報酬はひとりぶんしかないんだけどさ……。この金の十倍、150万だそう」

「ひ、150万も!？」

「そこで、君にちょっとしたアルバイトをしてほしいんだ。少年B、と一緒に」

怪訝な顔をする忠弘に、寺島は得意そうに言った。にやにやと、お人よしの笑みはそのままに。

「なあに、簡単な工場のお手伝いさ。僕が車で迎えに行くから、君は待ち合わせ場所に彼らを連れてきてくれないかい？ 働いてるところを盗撮して、更生してるところをアピールするのさ」

その提案を、面食らって聞いていた。

自分の過去に犯した罪で金が儲けて、さらには更生し、今はまじめに働いているというところを、世間に主張できるのだ。

もともとへんに意識したことはなかった被害者の目線というものがあるが、この瞬間、忠弘は「全てが味方になる」と、そう感じた。

「や、やります——ぜひ、やらしてください!」

忠弘は意気込んでそう言ったのだった。

（あのあとは、契約書とかに親指でハンコしたけど——こいつらは、知らせてない）

忠弘は、陽気に笑いあう2人に向けて、嘲笑の笑みを送った。

——つたく、この馬鹿どもが!

この言葉は、忠弘の胸中で幾度となく繰り返された。もうひとり、自分と同じことを考えている者がいるとも知らずに——

石島は鞆の中からノート型パソコンを取り出した。元より起動させてあったようで、画面を開くと同時に、こちらへと向けた。

画面には黒一色の背景に白い月、中央には白い文字で、「ムーンライト」と書いてある。

その画面のまま、放っておくこと3分ほど。蘭は無言で「Tabキー」を押した。アドレスバーや、「Enter」と書かれた文字が選択されては外され、下へむかつて行く。勧誘用の出会い系バナ——そのすぐ下に。

文字の映らない枠が、選択された。蘭がそのままクリックすると別のページへ飛んだ。それはさきほどの「ムーンライト」と非情に似通ったページで、しかし中央にはこう、記されてあった。

「復讐請負屋。あなたの気持ち、請負ます。」と。

「このホームページは、蘭さんので間違いありませんね？」

「……そーですね」

組み合わせた手の上にあごを置き、石島はぎよろぎよろとした目だけをこちらに向けた。

「利用規約には、1、現金のみ受け付ける。前金後払いにわけられる。追加報酬あり。2、あなたの事を口外してはならない。又、文書などに残してもならない。3、あなたを騙し、利用しようとしている。この基準は、あなたが決める。」

——このみつつ。他にもいくつかありますが、大まかこれが利用規約ですよな？」

「そーです」

ウェイトレスが運んできた抹茶にストローを入れて、石島とノートパソコンとを正面に見据えながら、ちゅうちゅうと吸った。

「蘭さん……」

唇を噛み締め、石島は思う。自分は、今、いったいなにをしようとしているのかと。目の前の男に、自分の苦しみがわかるのかと。ましてや、この男に人殺しなどできるのかと——しかし。

「蘭さん、わたしはねえ……警察なんて、もう、信じられんです。幹部職の汚職事件が謳歌し、警察は無能ばかり——それどころか、

わたしの妻や、子を奪った畜生どもの名前を明かさず、マスコミにぶちまけたわたしの怒りの部分だけを、おもしろおかしく強調していつの間にやら、わたしのほうが悪人のように、世間から見られていました。

勤め先まで、電話がかかってきてね……『まだ子供なのに、それ相手に一児の親が牙を向くのか』、と。こちらの人権を無視しておいて、向こうの人権だけが優先されて——！ 会社もリストラですよ……？

こんな理不尽な事が、あつてはならないんです！」

涙ながらに、低く押し込めながらも力説する石島。カップを両手に持ち、ストローでちゅうちゅうと飲んでいた蘭からも、どこことなく不快感、嫌悪感にいた霧囲気が流れ出した。

「——その通りですね、石島さん。子供だから、家庭環境が悪いから、世間の悪影響で——そんなものの、後付の理由にしかありません。林檎は、放っておいても腐りますから。」

ならば、誰に責任があるのか？ しかし、みなさんそこには目を向けず、いや、わざと無視して通過していきます」

淡々と喋り、見やると、石島は呆然とした表情で、こちらを見返していた。

「……失礼ですね。それでも、俺はまともですよ……？」

ストローをぺ、とテーブルの上に吐き出す蘭に、石島は自然と涙を流した。

（もはや、ネット詐欺だろうが、悪質なイタズラだろうが、なんでもいい）

ただ、終わらしてくれ、と。

自分の気持ちを受け止めてくれた、この男を失望する前に。

「支払い方法についてだが——わたしから、提案がある」

「……ふん？」

ひとつの工場の前に、ワゴン車は停まった。スクラップ工場である。

「さ、着いたよ。みんな降りて」

ドアを勢いよく開けると、元気よく三人は飛び出した。やっと陽の昇った、新鮮な朝日の中で伸びをする。

「君たち、ちゃんと履歴書は持ってきたかい？」

「任せてくださいよ、寺島さん」

哲夫がびしりと親指を立てた。その気持ちの良い返事につこりと笑うと、手を差し出した。

工場の中は朝の空気で澄んでいて、しん、としていた。

「それじゃあ、僕は履歴書もって、社長さんとこに行ってくるから、そのへんの機械でも見ててくれ。触っちゃダメだぞ」

「うーっす」

秀樹が元気よく声をあげて、同時に寺島は片手をあげた。3人の履歴書を中指で弾き、ひらひら振って見せる。そしてそのまま、作業室への出口に向かって足を進めた。

「……行っただか。ったく、なんか癪に障るやつだぜ」

寺島の退場を確認し、秀樹は険悪な表情で、床へ唾を吐いた。哲夫は慌てた。せっかくの仕事場でめんどうなトラブルが起きるかもしれないと思っただからだ。

「秀樹い、あんまし工場よごすなよな。いつ、どこで、誰が見てるかわからないんだぜえ？　これが就職試験かもしれないし」

「ああ？　なんでお前は、いつまでたっても肝がちっせんだよ！」

哲夫を怒鳴りつける秀樹の姿は、さきほどのワゴン社での顔とは全く違う、険悪なものへと変わっていた。

「ちっ。……。そういやよお、忠弘。さっきから気になってただけどよ。それ、中身なんなん？」

「あー……。これか？」

秀樹に言われ、つまらなさそうにいじっていた携帯電話をポケット

トにしまつと、ボストンバッグのファスナーを下ろした。

「ん……？ ボルト？ ネジ？ はあ？ なんに使うんだよ、これよう」

「知らね。あのスーパーに寺島さんが預けてたんだよ、俺宛に。リサイクルだつて聞いたぞ？」

「溶鉱炉にかけんのか……？」

ボストンバッグに詰まつた、大中小、さまざまな鉄の塊たち。彼らがこれの使い道を知るのは、すぐさきであつた。

一方、工場の外に出た寺島は、三枚の履歴書を丁寧に4つ折りにすると、胸のポケットにしまいこんだ。

次いでスーツの下のYシャツに手をかける。左右に両手を引くと、容易くボタンが飛び、服が破けて、地肌が陽にさらされた。

「ふいー……つたく、窒息しちまうぜえ……」

眼鏡を外すと足元に落とし、そのまま踏みつけて粉々にする。オイルバックの髪を両手でめちやくちゃに崩すと、ところどころツン、と突き出した、あの髪型になった。

そう、寺島 船灯とは、久遠 虎之助だったのだ。

「あゝ、臭い臭い。あんなガキどもと同じ空気を吸うだけで、脳みそ腐っちまうツ。——責任、とつてくれよ？ 請負屋さんよお」

「——ばっちしオケイ」

なにを考えているのか、ワゴン車のボンネットで座禅を組んでいた蘭は、さきほどの哲夫のように、びしりと親指を立てた。

「——車から降りろよ、うざつてえ……」

耳を小指でかきながら、疲れた声を出した。請負人 は一歩も動かず、「ごめん」と、ただ一言。

「ぐッ……。まあ、いいさ。それよか、そろそろ説明してもらおうか？」

「ん？」

「ん、じゃねえよ。—— 請負人 さん、あんたさあ、依頼主にな

に頼まれたんだよ?」

久遠の言葉。

一瞬だけ、沈黙をつくったが—— 請負人は、に、と唇の端を歪めた。

ばたん、と激しい音が響き、扉が開いた。続々と中に入ってくるのは、作業服の男たちである。

「……あ、こ、こんにちは!」

哲夫は、表情の硬い作業服の——この工場の作業員であろう人たちに、頭を下げた。だが、作業員たちは黙ったまま、厳しい視線を投げかけている。

その中から、スーツ姿の小柄な中年男性が出てきた。人のよさそうな笑みを浮かべ、好印象を受けた。それが、困ったような笑みを浮かべている。

「……。君たち、誰なのかな?」

「え、あ——今日から、ここでお世話になります、河野——」

慌てて自己紹介しようとした秀樹の顔面を、作業員の一人が、いきなりバールで殴打した。

「ぐあッ」

「ひ……!」

「な、なな……なにするんですかあ!」

抗議の声をあげた忠弘を無視し、突き飛ばすと、ファスナーの下ろされたポストンバッグへ数名の作業員が駆け寄った。

「——間違いねえ」

「やっぱり、貴様らが……!」

「……へ? え? な、なんの事ですか?」

憎悪に滾った目線をぶつけられ、忠弘は硬直した。そして、同時に感じていた。とてつもない、不安感を。まるで、幼い子供が道に迷ったかのような、そんな心細さだった。

あの寺島と出遇ったときと、比にならないほどに、嫌な予感がし

ていた。

「この備品、全部うちの作業所や、材料置き場から盗まれたモンですよ。社長！」

「え？ ええ？ ち、ちょっと待て、待ってくれ——」

慌てて弁解しようとした哲夫を、近くにいた男が殴り飛ばした。

「お前は黙ってるッ。今、俺らは社長と話してんだよッ」

「ああぐう……」

口をおさえ、うずくまる哲夫。忠弘の頭の中は、ぐるぐると回っていた。

（なんだ、なんだこれ——？ な、なにが起きてるんだ、一体——）
逃げなくては。逃げなくては非情にまずい事になる。この言葉だけが、頭の中をぐるりと、一周した。

「あ、あのおっ……」

恐怖が、疼き始める。声も裏返った。作業員や、社長がこちらを見る。

「あ、あの、お、ぼ——僕たちはただ、アルバイトにきただけなんです！ この鞆も、寺島って人に渡されて……！」

「寺島……？」

忠弘の言葉に、社長がぴくり、と反応した。片眉をあげて歩み寄り、こちらの顔を覗き込む。

「本当かい？」

「そ、そうです！ 本当です……寺島 船灯って人に——」
いける、と。

忠弘はそう思った。しかし、一瞬の沈黙のあとに続いたのは、作業員たちの笑い声だった。こちらを馬鹿にするように、嘲笑している。

「……なにがおかしいッ」

社長が怒鳴りつけると、隣にいた作業員を殴り倒した。

（え……？ なんて笑われたんだ、俺。なんでアイツ、殴ってるんだ？）

「坊や……ひとつ、イイコトを教えてやるっ」

「……………」

「寺島 船灯つてのは、俺の兄貴分でねえ……」

作業員を殴り倒した拳はそのままに、振り返った社長の表情は、修羅のように凄んでいた。スーツの内側に、手を差し込む。

「その人はなあ、とつくに死んでるんだよ！」

語気も荒く、スーツから取り出した物を、こちらに突きつける。

「……え——ええええええええ！？」

黒光りするソレは、間違いなく拳銃であつた。

「不愉快だ——お前ら、こいつら適当に殺^{バラ}して、コンクリに埋めてから裏の廃材置き場に捨てる！ 俺の目の前に、二度とツラ見せないようにやれよ！」

「わかりました。オラ、立てや！」

「ひ、ひえええ……」

もはやわけがわからず、忠弘は混乱していた。なぜこのような目にあつてしまったのか。

そして——

にやにやと。

作業服の男たちに引きずられる少年たちを眺めながら、久遠は笑つた。

「はン、こんなもんにつつかかるものかねえ——つたく、この馬鹿どもは！」

「……性格ちよゝわるーい……」

「うつるせえぞ！ それにこれは元々、あんたの計画だろうが、請負屋さんよ！」

ファーストフード店から買ったストロベリーシェイクを、音を防ごうともせずにくずくすこと吸う蘭。それにしれっ、と言葉を投げられ、久遠は持っていた双眼鏡を地面に叩き落とした。

「大体、俺は怒ってるんだぞ。人を道具にしやがって——お陰で、

いらん捜査費用もかかった。これじゃあ赤字もいいところだぜ？」

「——だいじょーぶ……」

唇のはしだけを上にひっぱり、歪めて笑みをつくった。

「報酬は前金15万——後払いにて、600万」

「600万？　け、前金かよ——全払いで15万だったわけじゃないのか？」

「あや？　全額で15万円って、俺、言った？」

請負人の言葉に、久遠はぐ、と喉を詰まらせ体をくの字に折り曲げて、激しく咳き込んだ。せえせえと息をしながら、下から睨み上げるようにして蘭を見やった。

「後は回収の方法……なんだけーれーどー」

そんなことは気にもせず、今だボンネットの上で足を抱えるようにして座っていた蘭は、裏声で歌った。

「もういや……こんな奴、とっとと矯正されりゃあいいのに……」

「なんか言った？」

「豆腐の角に頭をぶつけてくたばりやがれ、つつたんだよぉ！」

怒鳴り散らす久遠を、蘭は迷惑そうに見ながらも、一応、謝った。それから、と手を久遠に伸ばす。

「履歴書」

「……ああ、コレな？」

嘆息し、ポケットから紙を取り出すと、蘭に投げて渡した。蘭がそれを開くと、満足そうに頷いた。

「オ、ケイ。あとは、これを使って手紙を書く——けど、哲夫のは……不自然になるかな？」

「あーそうですかい。それはザンネンでございましたねえ」
「む……」

嬉しそうにせせら笑う久遠に、蘭は唸った。唸りながらも紙を自分のポケットにしまいこむ。

「それじゃあ、今回の報酬は、こいつら3人の戸籍でいいっしょ」

「……ああん？　おいおい、冗談きついぜ。コイツらは使えねえよ——歳も合わねえ。第一、こいつらガキなだけに、親御さんが血眼になって探しやがるぜ？」

久遠が芝居がかったしぐさでライター・内燃式だ――を取り出すと、それを煙草のさきに近づける――が、途中で炎が消えてしまった。

「いや、実在する人物　として――それに、予備に使える」

蘭の言葉を小耳に挟みながら、久遠が苛立たしげにライターを地面に叩きつけ、感情のまま踏み砕く。

蘭が、唇のはしを、くい、と上げた。

石島は、ぶるぶると震えながら、自分のノートパソコンを睨んでいた。画面の中には、ふてぶてしく笑いながら喋り続ける少年の姿があった。

「だからさあ、なんて言うの？　殺しちゃったのも、ありや事故だよ、事故。大体、なんで俺らが人を殺さなきゃいけないんだよ。ガキだってさ、暴れなきゃ死なずにすんだんだ――母親のほうよりはさきに死んだけどさ、父親はまだ生きてんだろ？　だったらいーんじゃないねえの？」

元々は、金だけが目的だったんだ――ああ、ここらへんは放送しないでくれよ――これは、俺らにとつてのビジネスだったんだよ。女の体なんて、ただのボーナスさ」

ふんぞり返るようにしてソファに座っていたのは、忠弘である。

画面の中の彼は、嬉しそうにけらけらと笑っていた。

石島は公園のベンチに座り、肩を怒りに震わせていた。すぐ隣には書類の束が散乱していた。

「――で、どーするんです？　依頼は続行しますう？　続行するんですたら、明日には彼らも終わりって感じですけど」

ソフトクリームを舐めながら、蘭は言った。直後には石島にぎりと睨まれ、顔を逸らしたが。

「——当たり前だ。こいつらには、反省の色さえない——！」

歯と歯の間から息を出し、石島はノートパソコンを閉じた。目を閉じ、震える息で深呼吸を繰り返す。

やっと落ち着いたのは、1分近く経ってからだった。

「……蘭さん。報酬の支払いに関してですが——」

「はい？」

静かな——鉛のような、重たい雰囲気と感情を滲ませない声音が、蘭の胸を叩いた。

「こいつらを殺してもらう前に、終わらせます。ただ、その場所に、立ち会って頂きたい。」

「……わたしが——するところを、見届けてほしい……」

「……りょーかい……」

ぱり、とコーンを噛み砕く。

少しだけ、苦い味がした。

久遠は、蘭の顔を見た。いまだに笑みがはりついている。

（こいつは今回の件——いや、今までは大抵そうだが……あまり、自分の情報を公開したからない）

それが普通だろう、と久遠は思った。しかし、久遠はなにかひっかかるものを感じていた。

（どうやって報酬を回収するか、だ？ 俺は無用な詮索はしない主義だが——）

（気にかけたからには、それなりに調べさせてもらうぜ、

請負人さんよお）

どんな些細な情報でも、俺にとってはビジネスだ。叩けばどんなほこりが出てくるのか。

久遠は、蘭の背を突き飛ばし、ボンネットから落とした。うまく受身をとって、こつちを不機嫌そうに見やる 請負人 に、冷淡な笑みを浮かべてやる。

（俺は 烏 —— 誰の味方でもねえ……）

「請負屋さんよ、今回は戸籍を貰ってやるが、調査費用や手伝い賃に、50万はよこせよな」

「いゝよ？」

請負人——蘭は事もなげに頷いた。そのままこちらに背を向けると、すたすたと歩き出す。

久遠は——動かなかった。蘭の背が消えるまで、ワゴン車に背を預けたままにしていた。

（後書き）

読了お疲れ様です。いかがでしたでしょうか。

お楽しみいただけたらこちらも幸いです。とても気分をまずく
していらっしゃいますれば、地面に額をこすりつけて謝ります。
ゴメンナサイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8971e/>

復讐請負人、蘭

2010年10月8日15時09分発行